

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「新出多言語資料からみた敦煌の社会」（平成26年度第2回研究会）

日時：平成26年10月26日（日曜日）午前10時より午後17時

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

報告者名（所属）

1) 松井太（AA研共同研究員，弘前大学），荒川慎太郎（AA研所員）

「プロジェクト全体の進捗について」

第1回研究会後の作業について班員相互の情報共有を図り，また外部資金による現地調査の方向性などについて検討した。

2) 松井太（AA研共同研究員，弘前大学）

「ウイグル語暦占文書の調査報告」

ベルリン科学アカデミーおよびロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルク東方文献研究所に所蔵される既刊行の暦占文書資料の再校訂案を提示して，漢文原典との比定の可能性について論じた。

3) 荒川慎太郎（AA研所員）

「International Conference on Inscription Studies 参加報告」

国際学会 International Conference on Inscription Studies の概要，興味深い発表二件の紹介を行った。学会は2014年8月11-13日，モンゴル国ウランバートルで開催された。発表の内訳はおおよそ，各種プロジェクトに関する総合的なもの3件，モンゴル語碑文に関するもの8件，突厥ルーン文字碑文5件，ウイグル語碑文1件，満洲語1件，パスパ1件，契丹1件，西夏2件などだった。このうち呉（契丹）と聶（西夏）の発表を紹介した。前者は，近年発見の墓誌における部族名「室韋」の解読に関わるものだった。後者は，近年河北省で発見された漢語・西夏語石碑（1287年刻）に，「夫人田氏，昔里鈴部」に相当する西夏文が確認できるというものであった。

4) 赤木崇敏（AA研共同研究員，大阪大学）

「2014年度河西回廊調査報告—二州八鎮の地理・景観—」

2014年夏季に実施した河西回廊（敦煌～蘭州間）の文物・景観調査について報告した。9～10世紀に敦煌を支配した河西帰義軍節度使政権の領域は，祁連山脈から流れ出る党河・榆林河・疏勒河の3水系の流域にまたがった。帰義軍政権の領域を示す「二州八鎮（あるいは六鎮）」という史料用語は，この3つの河川の上流～下流域に点在したオアシスの総称である。今夏は，この「二州八鎮」にあたる諸オアシスを巡り，各地の遺址・自然環境を調査した。本報告では，調査の主旨・内容を紹介するとともに，本プロジェクトに関する出土文物・遺址の現状について報告した。

5) 坂尻彰宏（AA研共同研究員，大阪大学）

「供養人像からみた帰義軍史(1) 莫高窟第196窟甬道南壁第1身の人物比定」

敦煌莫高窟第196窟甬道の供養人像については，題記のある北壁の二つの供養人像（索勳，索承勳）が主な研究対象となってきた。これに対して，題記の情報の少ない南壁第1身の比定は，ほとんどなされてこなかった。本報告では，題記の情報に加えて，供養人像の配置から考察を加えた。その結果，南壁第1身の人物比定に見通しを立てることができた。また，この比定により，張氏帰義軍時代（9C半～10C初）の政変の背景を考える上で，

新たな切り口を獲得することができた。

6) 岩尾一史 (AA 研共同研究員, 神戸市外国語大学)

「古代チベット碑文調査報告 (2014 年夏)」

2014 年 9 月に行ったチベット中央部に点在する古チベット語碑文調査の成果を報告し, 本プロジェクトのメインターゲットである敦煌莫高窟題記調査との関係を書体・書き手の点から論じた。

7) 全員

「今後の研究会の進め方と日程の調整」

今年度後半期における, 敦煌現地のフィールド調査および欧州所蔵出土文献の調査, また 3 月に実施する国際ワークショップについて, 要領を討議した。